

しあわせ

8 月 号



代えのきかないのちを

代えがきくよつに見ている

それは見ているのではなく

いのちを見失っているんですなあ

(梯實圓)

「手を合わす母」

ウランバナ、お盆のことです。中国で盂蘭盆と表記され、盂蘭盆会として法要が定着しました。

ウランバナとは、倒懸と訳されて逆さに釣りさされている苦しみを表す言葉です。

生前に犯した罪によって地獄で逆さ釣りにされて苦しみを受けている状態を表しています。

目連尊者が神通力によって亡き母親の姿を探してみると餓鬼道に落ちて苦しんでいることを知り、その苦しみを救うために山海の珍味を飢えに苦しむ人々に供養することによって餓鬼道に堕ちた母を救うことができたというお話から始まった仏事です。母は目連を育てるために餓鬼道に落ちる罪を造っていたのです。

自分や自分の家族のことばかりを考えている日暮しの中で、布施の心、すなわち他者の苦しみに思いを寄せることの大切さを伝える仏教行事です。

布施とは、ダーナ、旦那という言葉で、本来施しという意味。旦那さんとは、他者の幸せに貢献する人、自分の欲を離れる行為をする人のことです。つながりの中に活かされている喜びを御報謝する心が旦那、ダーナです。

法座案内

△盆会法要▽

八月 十一日(金) 昼席・夜席

十二日(土) 昼席

講師 海谷 真之 師

(江田島市 光源寺住職)

△法味の会▽

八月はお休みします

府中町山田二丁目一五十三
栢原山 龍仙寺

電話(〇八二二八)一四八二



かなり前ですが、カウカウという芸人さんの「あたりまえ体操」というネタが流行りました。覚えておられるでしょうか。

「右足だして、左足だしたら、歩ける♪」
 など、あたりまえのことを発見して歌にする。それが新鮮でもしろかったのです。あたりまえを発見するおもしろさ、それは、あたりまえにしていることが、じつはけつしてあたりまえではないということなのでしょう。

右足だして左足を出したら、たしかに歩けます。しかし、それは誰でもできることではありません。そもそも直立して二足歩行なおいえできるのは人間だけですし、それも、ある程度成長して、健康状態をたもっている人でないとできません。お寺のなかでも、二歳の長男と、狭窄症と日々格闘している前坊守には、けつして容易なことではありません。また、たとえ足を出しても、大地がしっかり支えてくれなければ歩けません。プールの中や、スケートリンクではそ

うはいかないでしょう。カウカウさんの「あたりまえ体操」は、じつは「ありがたい体操」だったのです。

いま、この「しあわせ」の原稿を新幹線のなかで書いています。これから二週間、ご本山の安居（雨季の勉強会）の講義を勤めるために京都に向かっているのですが、住職になつてこれほど長くお寺をはなれることはなかったので、お寺を護ってくれる前住職と前坊守そして坊守に感謝しつつ上落しています。

「お父さんと二週間はなれたことない…」
 昨晚は三年生の長女も泣いていました。五才の次女は一週間前から「パパがいなくなる夢をみた」というほど情緒不安定でしたが、いよいよ「行ってきます」の時になると、お寺の外まで見送りになながらも、笑顔は一切ありません。姿が見えなくなるまで涙をこらえていたようで、案の定、新幹線のなかには、絶望の慟哭動画が送られてきました。

「大丈夫、お父さんちゃんと帰ってくるから。帰ったら何して遊ぶか、考えて待っててね。」
 昨晚はそういういい聞かせて寝かしつけていたが、ほんとうは、二週間後に帰ってこれるかどうか、また会えるかどうか、わたしには何の根拠もありません。そう思うとお念仏がこぼれ、昨晚は、例えようもなく愛おしい夜に感じられました。きつと子供たちにとつても、いつもとは違う特別な夜だったでしょう。本当はどの夜も、どの瞬間も、かけがえのない特別な時間であるはずですが、わたしたちは「ありがたい」日々を、まさしく「あたりまえ」にして過ごしてしまっているのですね。梯實圓和上はよく仰っていました。

「代えのきかないのちを
 代えがきくよつに見ている
 それは見ているのではなく
 いのちを見失っているんですなあ」

いのちとは、かけがえのないもの。かけが

えがないとは、掛け代えることができない、代えがきかないことです。あなたという存在は、宇宙の果てまで探しても代わりはいない。今日という一日は、二度と訪れることはない。そういう代えがきかないところに、はじめて感じ取っていけるものが、いのちなのです。言葉をかえせば、代えのきかないのちを「あたりまえ」にしてしまっているかぎり、たとえ夜通し語りあつていても、何十年、一緒に暮らしていたとしても、わたしたちは、お互いのいのちを見失い続けているのですね。

「ありがたい」ものを「あたりまえ」にする凡夫の眼では、いのちの影すら捉えられませぬ。しかし、代えのきかないこのいのちを直付けに直感するまなざしもあるのです。それこそが、如来の智慧でした。お念仏をいただくとは、その如来の智慧をいただいで、如来のまなざしのなかで、一人一人が、いのちに出遇っていく営みなのです。